

2016年（平成28年）11月11日 毎日新聞掲載



目指すべきはキュウリ、手のかかるトマト大半

兵庫のドイツ人住職ネルケさん、弟子の自主性不足に辛口も
高崎 / 群馬

ドイツ人僧で兵庫県新温泉町にある“自給自足”の寺「安泰寺」住職、ネルケ無方（むほう）さん（48）が、高崎市吉井町神保の仁叟寺で開かれた曹洞宗婦人会関東管区研修会で講演した。

演題は「遠路はるばるニッポンへ～青い目が見た ZEN」。ネルケさんは、上から垂らした1本の麻糸を自分でつかんで伸びていくキュウリのような弟子になるように師匠から教えられた。修行の心得として、自分の弟子たちにもそう伝えている。

ところが、日本人にはトマトのような弟子が多いという。頑丈な支柱を立て、何日かごとひもで結ばないと風で倒れてしまう。水をあげないといけないが、多すぎると腐ってしまう。「日本人は、親が手をかけ、学校ではひもで結ばれ、社会に出ても支柱が用意されている。マニュアルがあるとその通りにするが、『自分で作れ』と言っても戸惑ってしまう」と語った。

ネルケさんは1968年にドイツ・西ベルリンで生まれ、牧師だった祖父の教会で育った。7歳の時に母が病死してから「生きる」意味を考えるようになり、高校生の時に禅と出合った。90年から1年間京都大学に留学し、日本の寺で禅を修行。一度帰国したが、

92年に再び来日して出家した。2001年には大阪市の大阪城公園で「ホームレス雲水」として毎朝座禅会を開き、02年に亡くなった師の後を継ぎ安泰寺の住職となった。